

第38回金沢大学考古学大会の概要

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/36252

考察するなかで縄文土偶との関連性を指摘し、埴輪との共通性にも言及する[岩松 2011]。人形土器 B 類と盾持人埴輪とは時間的に間隙があるものの、辟邪の役目をもつ盾持人埴輪が人形土器 B 類と無関係なところから生じたとは考えにくいと私は考える。

人形土器 B 類は、縄文土偶からの流れをもつ土偶形容器にたどれる系譜を引く一方で、埴輪へつながる要素も認められる^(註6)。

そして、その最大の性格は「辟邪」ということになると私は考えている。

今後さらなる検討を進めていきたい。

註

註1 西一里塚遺跡群から約 1.5km離れた佐久市西一本柳遺跡例は、弥生時代中期後半の住居跡から検出された。頭頂に開口部をもち、端正なつくりでやさしい表情を呈しているため人形土器 A 類に分類したい。ただし口が二つの穴で作られている点を誇張表現とみるならば西一里塚遺跡群 No1 例と通じるところもみられるわけであり、注目したい事例である。

註2 平野進一氏もその開口部が小さく納入物の出し入れは困難が伴うことを指摘するが、その体内には信仰にかかわる人骨等、何か特殊なものが納入されていた可能性もあり、呪術的な側面からの検討を要すると論じている[平野 2001]。

註3 墓もしくは墓域を、その誇張された形相によって邪気などから防ぐ役割を果たしていたと考えるが、その反対に死者の霊を墓・墓域に封じ込めておく役割もあったかもしれない。墓とは何かということとも関連する大きな問題である。

註4 人面付土器の機能・用途についてもこの観点から検討する必要があるだろう。

註5 設楽氏はこれらを「顔面付土器」と分類している。

註6 西一里塚遺跡群 No1 例の口の「┘」状の表現は、山梨県黒駒遺跡例など縄文土偶にもあるが、埼玉県東松山市おくま山古墳の盾持人埴輪や和歌山県大日山 35 号古墳の両面人物埴輪など、埴輪にも認められるものであり、私は注目している。

引用参考文献

石川日出志 1987a 「土偶形容器と顔面付土器」『弥生文化の研究』第 8 巻 雄山閣

石川日出志 1987b 「人面付土器」『季刊考古学』19

号 雄山閣

岩松保 2011 「人面付き土器の系譜 (上)(下)」『京都府埋蔵文化財情報』115・116 号

黒沢浩 1997 「東日本の人面・顔面」『考古学ジャーナル』No.416

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990 『有馬遺跡Ⅱ』

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999 『小八木志志貝戸遺跡群Ⅰ』

小山岳夫 2012 「館遺跡発見の土偶形容器」『佐久考古通信 No.110 特集 佐久の弥生顔面』佐久考古学会

櫻井秀雄 2012 「西一里塚遺跡群出土の人形土器」『佐久考古通信 No.110 特集 佐久の弥生顔面』佐久考古学会

設楽博己 1999 「土偶形容器と黥面付土器の製作技術に関する覚書」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 77 集

設楽博己 2011 「男と女の弥生時代」『列島の考古学 弥生時代』河出書房新社

設楽博己 2012 「辟邪の造形」『佐久考古通信 No.110 特集 佐久の弥生顔面』佐久考古学会

長野県埋蔵文化財センター 1999 『榎田遺跡』

長野県埋蔵文化財センター 1998～2000 『松原遺跡』

長野県埋蔵文化財センター 2012 『濁り遺跡 久保田遺跡 西一里塚遺跡群』

平野進一 2001 「北関東西部における弥生後期の人面付土器とその性格」『考古聚英 梅澤重昭先生退官記念論文集』

前田清彦 2009 「土偶形容器と人面付土器」『中部の弥生時代研究』中部の弥生時代研究刊行会



第 38 回金沢大学考古学大会

平成 24 年 10 月 13 日、第 38 回金沢大学考古学大会を開催いたしました。本号でその発表の概要を掲載します。

■大会発表タイトル及び発表者

松井広信(人間社会環境研究科 M1)「四爪鉄錐の基礎的研究」

坂本圭介 (人間社会環境研究科 M2)「ホンジュラス、コパン遺跡におけるヒスイ製品製作活動に関する一考察」

原田幹 (人間社会環境研究科 D3)「破土器」と「石犁」の使用痕分析」

櫻井秀雄 (長野県埋蔵文化財センター)「弥生時代の人形土器」

伊藤伸幸 (名古屋大学)「エル・サルバドル、チャルチュアパ遺跡の建築史」

■ 発表の概要

四爪鉄錨の基礎的研究

松井 広信

発表内容については、論文「四爪鉄錨の基礎的研究—船に関わるモノの形式学的考察—」(『金沢大学考古学紀要』34号, 2013年, 頁27-52)として公表した。

ホンジュラス、コパン遺跡におけるヒスイ製品製作活動に関する一考察

坂本 圭介

2010年度からホンジュラス国立人類学歴史学研究所において、資料調査を継続してきた。その過程で、新コパン考古学プロジェクト(PROARCO)所有のヒスイ製品製作活動に関する一括出土資料の提供を受け、分析を行う機会を得た。一括出土資料は、コパン遺跡の中心グループの北部に位置する9L-23建造物グループの建造物107、埋葬100の副葬品として出土している。資料の多くは打撃痕の残る荒割段階のヒスイであった。未製品としては、球形、円形、方形、斧形ビーズが出土している。また、製品としてモザイク片が2点出土していた。球形、円形、方形、斧形ビーズの分類は筆者独自のものである。この分類については、一括出土資料から製品が出土していないことをふまえても、おおむね妥当であると考えている。分析結果としては、埋葬100の被葬者が一連のヒスイ製品製作活動を行っていたのではないかと結論づけた。なお、本解釈は筆者に責任があり、PROARCOの公式見解ではないことを付記しておく。

「破土器」と「石犁」の使用痕分析

原田 幹

破土器と石犁は、中国の長江下流域の新石器時代

良渚文化にともなう特徴的な石器である。破土器は、三角形を呈し、一辺に刃部をもつ石器である。刃部の反対側に長辺を延長させた突出部をつけるもの、短辺に挟りを入れるものなどがある。石犁は、二等辺三角形を呈し、二辺に刃部をもつ大型の石器である。これらの石器は、その名称が示すように、犁などの耕起具だと考えられているが、その機能や使用方法については様々な説がある。本発表では、2000～2002年、2011年と、数回にわたって実施した使用痕分析の成果をもとに、これらの石器の機能について考察した。

使用痕分析 石器使用痕分析は、使用によって石器に形成された痕跡をもとに、石器の機能・用途を推定する分析手法である。実験に基づいて使用痕を解釈する方法は、実験使用痕分析と呼ばれる。本研究では、落射照明型金属顕微鏡を用いた高倍率法を用いて、微小光沢面(ポリッシュ)、線状痕などの使用痕の観察を行っている。

破土器の使用痕分析 使用痕は、イネ科などの草本植物と関係する微小光沢面が検出された。光沢面の分布範囲は広く、植物がかなり密集した場所で使用され、石器の運動範囲も大きなことが推測される。なお、光沢面にはやや荒れた部分がみられ、土などが混入するような状況も想定される。この光沢面の荒れは、表面と裏面で程度が異なる場合があり、面の使い分けがはっきりしていたとみられる。裏面の方が光沢の荒れが顕著であることから、裏面を地面の側に向けて地表に近い部分で使われたと考えられる。また、石器は着柄して使用されたとみられ、裏面に柄をあてがい、表面にかけて紐状のもので緊縛していたと推定される。石器の操作方向はこの柄の方向(長側辺)と平行し、対象物に対し刃は斜めに接触したと考えられる。

石犁の使用痕分析 イネ科など草本植物と関係する微小光沢面が検出された。ただし、部分的(特に先端部)に荒れた光沢面もみられることから、土と接触するような状況も想定される。石器の操作方法については、両刃部とも観察される線状痕が平行であることから、両刃部の交わる頂点を先端とし、二つの刃が使用されている。表面と裏面では光沢の分布が異なる。表面では広い範囲に分布することから、器面がむき出しの状態に対象物と接触していたのであろう。一方、裏面では刃縁以外はほとんど使用痕が認められず、この面は柄または台座に接したと考

えられる。

まとめ 分析の結果、破土器と石犁の機能について、従来の説とは異なる見解が得られた。破土器、石犁のいずれも、使用痕の形成に草本植物が関与していたと考えられ、この点において、耕起具とする従来の評価は再考を要する。ただし、作業時に土が介在した状況も想定されるなど、土と植物のどちらが主でどちらが従であるかは、もう少し検討する必要がある。現在進めている実験の結果とも比較しつつ、石器が使用された状況をより絞り込んでいきたい。

エル・サルバドル、チャルチュアパ遺跡の建築史 伊藤 伸幸

チャルチュアパ遺跡は、エル・サルバドル共和国の東部に位置しており、ラス・ビクトリアス、エル・トラピチェ、カサ・ブランカ、タスマル、ペニャテなどの地区に分かれている。タスマル地区はチャルチュアパ遺跡では、南に位置している。この地区では、ボググスが1940年代と1950年代初めに発掘を行った。1947年には国の歴史記念物として認定されたが、考古学的に明らかになっていない点が多くあった。この曖昧さはこの地区の建造物の発展段階の複雑さにあり、様々な大小の改築や増築が建造物に施されていた。

2004-2008・2011-2012年のタスマル地区調査は、測量調査に基づいて建てられた仮設に従って実施された。仮説は、以下に記すとおりである。

“列柱の建造物”(西基壇の上部建造物)を測量した結果、この建造物は南北30m長で独立して建てられたことが確認できた。B1-1建造物北には、“列柱の建造物”に似た建造物(北基壇)があった。北基壇は西基壇と同じ長さを持ち、それぞれの建築軸は直角に近い87度で交差している。B1-1建造物は、大きな基壇(大基壇)の上に建っていた。大基壇は東西約73m南北87mであった。北基壇と西基壇は大基壇の一部と成っていた。この基壇2基は類似しており、同時期若しくはなんらかの関係を持って、当初、独立して建造されたことが考えられる。後の時期の増改築が考慮されるが、上部の建造物が確認されるのは西基壇のみである。一方、タスマル地区の建造物の正面が西を向いている。このため、北基壇より西基壇が重要な意味をもち、中心となる表玄関があった。北基壇が西基壇の正面に対して左

右対称に建てられていたと仮定するならば、南基壇は北基壇と同じ位置にある可能性がある。西基壇と北基壇の距離を測った結果を用いて、南基壇の位置を計算した。仮説では、南基壇の南側は大ピラミッドの南端に相当する。また、この基壇では少なくとも3回拡張された可能性がある。この推定される南基壇の南側は最初か2度目の建設期に相当する。このような建造物の拡張が北・西・南基壇にも考えられる。同様に、東基壇でも建築における対称軸を想定すると、その位置が計算できる。以上の様に、東西南北に基壇があり、その中央に主神殿があると仮定した。

2004-2008年の調査では南基壇の存在を確認し、主神殿の一部を発掘した。2011-2012年の調査ではこの主神殿の規模と建築様式を調査した。今回は2011-2012年に行った調査の成果に基づいたチャルチュアパ遺跡の建築史を発表した。